沖縄訪問レポート

初の沖縄訪問は大成功

理事・初代青年部長　早川（はやかわ）　友久（ともひさ）

■李登輝元総統が沖縄ご到着【一日目】

李登輝元総統は九月二十二日朝、初めての沖縄訪問に向かうため、台北桃園国際空港へ姿を見せた。搭乗のチャイナエアラインCI一二〇便は午前八時十五分の定刻通り出発した。

約一時間あまりのフライトの後、雲の切れ目から沖縄本島が姿を現しはじめると、李氏は立ち上がって窓の外に目を向けた。徐々に高度が下がるに連れ、沖縄は雨模様。

那覇空港では、全国から駆けつけた本会会員約三十名をはじめ、日本会議沖縄、新しい歴史教科書をつくる会沖縄県支部、キリストの幕屋、拓殖大学校友会沖縄県支部などの方々が李元総統を歓声と拍手で出迎えた。

李元総統はそのまま南部へ向かい、摩文仁（まぶに）丘にある沖縄県営平和祈念公園を訪れた。一行は十二時過ぎに到着。まず沖縄平和祈念堂に献花した後、園内にある「平和の礎（いしじ）」へ向かった。

「平和の礎」は、沖縄での戦歿者の名前が国籍を問わず刻まれており、その石碑が扇状に建立されている。沖縄で戦歿した台湾人は総勢三十四柱。李元総統は石碑に深々と一礼された。

台湾からはテレビ局が五社、台北に支局を持つ日本のマスコミ六社が来沖して取材に当たった。「平和の火」広場で紺碧の海を背に、沖縄で初となるインタビューを受け、沖縄の印象について問われると、「第二次大戦であれほど被害を蒙っていながら、見事に整備されている。道も街も見事に設計されている感じを受け、非常に頼もしい。これからは沖縄が日本の先頭にたって行くようにならなきゃいけない」と沖縄への期待を示された。

昼過ぎに雨は上がったものの湿度が高く、蒸し暑い天気に。歩いている途中、背広を脱いでワイシャツ姿になる一場面もあった。

午後からは同じく糸満市の「ひめゆり平和祈念資料館」を訪問。ぐずついた天気のためか、台湾よりも湿度が高く感じる。

沖縄陸軍病院第三外科壕跡に建つ「ひめゆりの塔」に到着し、李元総統は深々と三度頭を垂れた。続いて、沖縄戦を実際に体験し、現在は語り部を務める新崎昌子（あらさきまさこ）さんの案内で、隣接する資料館を見学した。

資料館には年間九十万人が訪れるものの、首相が来館したことはないと聞くと、「総理になったら、まずここを

見学して、沖縄のことを知ってから東京で仕事をするべきだ」と語った。

見学を終え、一行が資料館を後にした途端、バケツの底が抜けたようなスコール。一行は投宿先の宜野湾市ラグナガーデンホテルで休憩された。

■李登輝学校日本校友会が歓迎会

夕方からは、那覇市内の琉球料理レストラン「四つ竹」において李登輝学校日本校友会（片木裕一理事長）主催の歓迎晩餐会に出席された。

午後六時半、李元総統は沖縄伝統の「かりゆし」に着替え、六十名あまりが総立ちで出迎えると、笑顔で出席者と握手をしながら着座。

片木理事長が司会をつとめ、柚原正敬・本会常務理事の歓迎挨拶の後、挨拶に立った李元総統はポケットから原稿を取り出し、台湾の政情についてミニ講演会。「講演は明日の楽しみに」と主催者側をハラハラさせた。

その後の乾杯では、注がれたビールを一気飲み。いつもながらのサービス精神に一同から大拍手。しかし、台湾から同行してきた主治医の陳雲亮先生は複雑な表情。

厳重警備の中にあっても、本会会員限定の晩餐会ということで和やかな雰囲気で会は進み、李氏と握手したり記念撮影を求める会員の姿も。また、舞台で妖艶な琉球舞踊が披露されると、李氏も箸を止めてしばし熱心に見入っていた。その後、出席者一同と記念写真におさまり、歓迎会は盛会のうちにお開きとなった。

■講演会は満席【二日目】

二十三日は、午前中は休息し、午後三時から宜野湾市の沖縄コンベンション劇場で「学問のすゝめと日本文化の特徴」と題しての講演に臨んだ。千五百席のうち、前売券は前日までに完売し、わずかに残った当日券も、発売後まもなく売り切れ、満席となった。

大変お気に召しているという鶯色の「かりゆし」を身にまとった李元総統は、約一時間にわたる講演を行い、海

那覇空港では地元や全国から駆けつけた人々が出迎えた（9月22日）

ワイシャツ姿で南部戦跡を参拝（9月22日）

新岬昌子さんの案内により「ひめゆりの塔」を参拝（9月22日）

駆けつけた李登輝学校日本校友会のメンバーと記念撮影（9月22日）

外からも駆けつけた聴衆に訴えた。

「文明開化による風俗の変化については、表面的な西洋模倣として非難する声もあったが、日本人が他の文明から有益なものを学び取る高い能力を備えている表れ。

最近の日本はあまりにも物質的な面に傾いてしまい、伝統が軽んじられている。伝統なくして、真の進歩などありえない。精神的豊かさを求める日本文化は、日本だけが持つ世界に稀な素晴らしい文化。日本人がこんな優れた文化をそう易々と捨て去るはずはないと信じている」

などと語り、万雷の拍手を受け、講演は無事に終了した。

午後六時過ぎからは隣接するラグナガーデンホテルでレセプションが開催され、羅坤粲・台北駐日代表処代表代行や李明宗・台北駐日代表処那覇分処長ら百三十名が出席。登壇した李元総統は疲れも見せず、「品格と教養を磨くことこそ、人生における学問のすすめ」と再び訴えた。

台湾から同行のテレビ局各社は、李元総統の入退場ごとにカメラを向け、一言でもコメントを取りたいと声を掛けており、台湾での李元総統への関心の高さと影響力の強さが伺える。

■東南植物楽園で爆弾発言【三日目】

二十四日午前、李元総統は沖縄市の「東南植物楽園」を訪問した。出迎えた大林千乃園長は台僑で、お父上の正宗氏と李元総統は昵懇の仲とのこと。農業経済学者らしく、園内約四〇万平方メートルの敷地に植えられた東南アジアなど各地の植物を大林園長自らの案内で周り、熱心に質問したり、パッションフルーツのシェイクを賞味するなどして楽しんだ。途中、設けられた記者会見の時間には、折しも前日に発足した麻生新政権への期待や東南植物楽園の印象について答えた。

その後、園内レストランで催された歓迎昼食会には、仲井眞弘多・沖縄県知事や稲嶺恵一・前知事、高嶺善伸・県議会議長らとテーブルを囲んだ。

パッションフルーツをくり抜いた器に注がれた泡盛で乾杯すると、挨拶に立った李元総統は「以前からこちらの植物園を訪れたいと思っていたが、なかなか来られない事情があってやっと念願叶った。広大な敷地で様々な植物を管理していることで、沖縄の農業経済の発展にも寄与できていることと思う。台湾と沖縄は地域的にも非常に近い。戦前の日本統治時代には、沖縄の漁民は尖閣諸島近辺で漁業をして生計を立てていた。取った魚は本土に持っていくよりも、基隆の方が近いのでそこで水揚げして消費していた。尖閣諸島はまちがいなく日本の領土。問題は漁業権の問題だけ。私が総統の時、解決のため台湾の農業委員会に指示して日本の農林水産省と交渉を始めた。馬英九政権が主張している『尖閣諸島は中華民国の領土』という主張とは全く違う。あれはただの政治的なものだ」

などと爆弾発言。

この発言に報道陣も色めき立ち、NHKなどは支局に飛んで帰り、翌朝の各紙はこの発言が見出しとなった。

午後からは、那覇市にある世界遺産の首里城を見学され、小旗を振って出迎えた本会会員らにわざわざ歩み寄って挨拶された。城内では、首里城を管理運営する海洋博覧会記念公園管理財団の冨田祐次理事長らの案内で各建物や展示物を見学。日本とも台湾とも異なる琉球独自の文化を鑑賞された。

夜は、那覇市内で開催された琉球華僑総会主催の晩餐会に出席。

ホテルへ戻られると、精力的に日本の報道陣と膝を交えて取材を受け、本会事務局の訪問を受けるなどした。

満座の聴衆に明治維新や日本文化について語りかけた（9月23日）

仲井眞知事らとの昼食会では「尖閣は日本領」と爆弾発言（9月24日）

冨田祐次氏らの案内により世界遺産の首里城を見学（9月24日）

無事に台北に到着して黄昆輝氏らが出迎えて労をねぎらった（9月25日）

■報道陣との朝食会に出席

二十五日は帰国の日。午前八時半から一時間ほど報道陣との朝食会に臨まれた李元総統は「四日間お疲れさまでした。大変だったでしょう」と報道陣を労った。また今回の訪日に触れ「ここ二、三年で私の訪日はずいぶん自由になった。沖縄県警は四百人を動員して私を守ってくれた。全く感謝に堪えない」などと述べた。

午前十一時半すぎ、李元総統は本会会員らが見送る那覇空港の特別入口に到着。昨年は、成田空港での見送りの中に紛れ込んだ中国人にペットボトルを投げられる事件もあったため、見送る人々や報道陣に対する警備は厳戒態勢。車を降りた李元総統は、万歳三唱で見送る人々に大きく手を挙げて謝意を示しながら空港内に入られた。

搭乗した午前十一時四十五分発のチャイナエアラインCI一二一便は予定通り沖縄を後にし、台湾時間の午後十二時五分過ぎ、台北桃園国際空港へ到着。空港では、黄昆輝・台湾団結聯盟主席、城仲模・台湾李登輝之友会総会長、郭生玉・群策会秘書長や李登輝学校のスタッフらが出迎え、李元総統の訪日を労った。

これで四日間にわたった沖縄初訪問の旅は成功裡に幕を下ろした。